

ウルリム
響

ウルリム

特定非営利活動法人

聖公会生野センター機関誌

第36号

2005年8月20日発行

題字：康秀峰

URL <http://www.nskk.org/province/ikuno>

E-mail: ikuno@nskk.org

子どもの悲しみを忘れない

杉山 修一

10年程前、前任の学校にひとりの受験生の親から手紙が届いた。手紙には娘が何としても入学したくて準備を重ねてきたのだけれど結果は不合格となり、親が予想していた以上に落ち込んでいる。さしつかえなければ、娘に励ましのことばでも書き送ってもらえないかというものであった。早速その受験生に私は心をこめて手紙を書いた。程なくこの少女から私宛に丁寧なお礼の手紙が来た。受験に失敗した学校の校長先生から手紙をもらえるとは思っていなかったこと、自分の力が足りなかったのに励ましてくれたことがとても嬉しかったこと、そして最後にこう締めくくってあった。「私は入学することはできなかったけれど、校長先生の学校を受験できたことを誇りに思っています。今は心を切り替えて他の学校に行くことになりましたが、先生の学校を受験できたことを一生の宝にしていきます。」この手紙を読んで、私は入学試験というものの過酷なまでの公平さと限界を感じながらも、受験したことを誇りに思うことができるような学校でありたいものだと思った。

昨年4月にプール学院に赴任して、かつて入学試験において在日韓国人・朝鮮人や帰化した人々に入学時にハンディをつけるということが行われ

ていたということを人権教育の冊子を通じて知った。当時このことはマスコミや教会関係からも大きな問題として



厳しく批判され、以後入学にあたっての差別は一切行われなくなり、このことをきっかけとして充実した人権教育が行われるようになっていく。当時の新聞記事に12歳の少女が受験を拒否されたことを知って泣き崩れたようすが載っていた。私はこのひとりの少女がその時どれほどの悲しみと苦しみを小さな胸の中で抱いたかを想像することができた。自分の能力でも努力でもない、どうにもならぬ事実によって受験をすら認められなかったこの少女の悲しみはどれほど大きなものであったか。学校はいつの時代も何らかの基準で子どもを選別してきた。選別することによってしか成り立ち得ぬ学校教育の現実には常に子どもたちの悲しみを無視してきたのではないか。落ちた学校を受験できたことを誇りに思うと言った子どものことを思うと、受験することすら拒まれたこの少女の悲しみは私たちが今後一切忘れてはならない悲しみだと思う。眼に見える形での差別はもちろん行われていないのだけれども、教育の現場で、それがいかに公平な基準であれ、選別という営みを罪の意識なく行くとすれば、そしてひとりの少女の悲しみを忘れ去ることがあるとすれば、そこに新たな差別への兆しがあるのだと自省したい。

(すぎやま しゅういち 司祭
プール学院学院長、同中高校長)

もくじ

1. 子どもの悲しみを忘れない
2. 時のしるし 無窮花に送られて
3. 祝=クリンもだん美術教室移転1周年=
4. 聖公会生野センター法人化記念講演録
社会宣教の霊性 =分かち合いの家を中心に=
8. 教育の政治利用を抑制してきた装置の機能停止
9. 歴史をめぐる闘い
10. こんな本あります 「本から在日コリアンを考える」②
11. 詩「悔悟」
12. 「안녕하세요=あんにょんはせよ」の時間から
13. こう変わる・変わった=聖公会生野センター法人化=②
14. 編集委員リレーエッセイ

先日、京都復活教会で李甲成さんの葬儀を司式した。李さんは日本統治下の1917年に朝鮮慶尚北道で生まれ、1931年、14歳のとき、おじさんを頼って一人で日本に渡航。新聞配達、牛乳配達など、苦学して成長されたという。まさにその年、「満州某重大事件」を報じる新聞を李さんが配った、とご遺族からうかがった。

この「某重大事件」とは満州事変のことである。1931年9月18日夜、日本の関東軍は参謀石原莞爾中佐らの謀略計画により柳条湖で満鉄線を爆破し、それを中国軍のしわざと偽って、攻撃を開始した。いわゆる十五年戦争の始まりである。翌32年に日本は傀儡国家「満州国」を樹立した。

李さんはやがてアメリカ人宣教師モリス司祭と出会い、1939年洗礼を受けて教会の活発なメンバーとなられた。

1939年とはどういう時代であっただろうか。4月、宗教団体法が公布された。宗教を国家目的のために統制しようとするこの法律によって、日本聖公会はやがて組織の解消を強いられることになる。5月、ノモンハン事件勃発。「満州国」軍とモンゴル軍の衝突をきっかけとして日本軍（関東軍）とソ連軍の大規模な戦闘に発展した。9月、ドイツ軍がポーランドに侵攻、第二次大戦が始まった。12月、朝鮮総督府は「朝鮮人の氏名に関する件」を公布した。日本式の「氏」を名乗らせる「創氏改名」である。

その前年の1938年9月、朝鮮総督府は最後まで抵抗が強かった朝鮮の長老教会に神社参拝を強要、決議させた。総動員をかけた警察の脅迫のもとで、長老派総会は「神社は宗教ではないからキリスト教教理に違反しない。愛国的国家儀式として神社参拝を率先励行する」と表明せざるを得なかった。神社参拝に反対して捕らえられていた長老派の朱基徹牧師は、1939年2月、半年ぶりに釈放され、平壤山亭峴教会で2000名の会衆を前に「五つのわたしの祈り」という

説教をした。その冒頭は次のようである。

「私は彼らの手によって何度目か逮捕され、この度は長い囚われの身となっていました。この山亭峴の講壇に再び立つこととなりました。……私は今まさに、死に直面しています。私の命を奪おうとする黒い手は、時々刻々と迫っています。死に直面した私は、『死の権勢に打ち勝たせてください』と祈らないわけにはいきません。」

朱基徹牧師は1944年、拷問による衰弱の果てに平壤刑務所で獄死した。

このような時代を日本で過ごされた李さんは、どれほどの困難と圧迫を強いられていたことだろうか。朝鮮人が朝鮮人として生きることを許されないということは、人が人として生きることを許されないことと同じである。大日本帝国は日本人にとってもそうであったが、まして朝鮮人にとっては巨大な牢獄であった。

しかし李さんは単に受動的に過ごされたのではない。東京の本郷聖テモテ教会の信徒として、大学卒業後は読売新聞に入社、次いで東京日々新聞（現、毎日新聞）の記者として活躍された。李さんは生涯、ジャーナリストとしての誇りを持っておられたという。

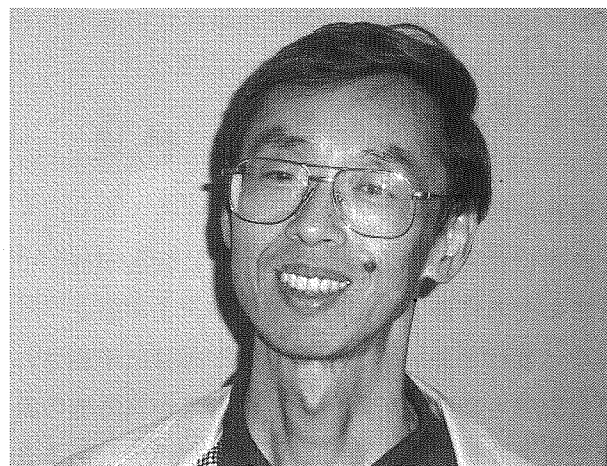
1945年8月15日、李さんは八王子で終戦を迎えた。しかし正確に言えば「解放」である。結婚された李さんは京都に帰り、5人の子どもたちを育てながら西陣織の製造・販売に従事された。5人はすべて教会付属の幼稚園に通われた。日本の姓を使っておられたが、お子さんたちの名まえはすべて漢字の音読みである。それは、李さんとそのご家族が困難の中にも力強く生きてこられたことの証しであるような気がする。

7月下旬、李甲成さんの棺を迎え、翌日その棺を送り出した教会の門の傍らには、無窮花（ムグンファ。むくげ）が咲き誇っていた。朝に咲いて夕方に落ち、また朝咲いて、次の日も次の日も咲き続けて100日に至る。韓国・朝鮮を代表

無窮花（ムグンファ）に送られて

在日韓国人李甲成（イ・ガフソン）さんのこと

井田 泉



井田 泉 司祭

する花である。ご長男の明さんは、「若い日の信仰が、父の人生を決めた」と話された。

私はこの文の中でほとんど「朝鮮」という言葉を使った。本来、「朝鮮」は美しい、誇りある国と民族の名前である。檀君・箕氏の神話に遡る朝鮮、1392年に李成桂（イ・ソンゲ）が創立し、500年以上の歴史を刻んだ朝鮮王朝。朝の光が鮮やかで美しい国。ある宣教師は“The Land of Morning Calm”（朝の静謐の地）と表現した。この国の独立を奪い、民族の歴史と文化と言葉を奪い、誇りある美しい民族の名を蔑称に変えてしまったのは日本である。私たちにはこの名まえの尊厳を回復する責任がある。

祝＝クリンもだん美術教室移転1周年＝

クリンもだん美術教室が移転して1周年を記念し、7月17,18の2日間、教室を「画廊」にして1周年展をおこないました。受講生を中心にしながら、保護者、講師、ボランティア、スタッフ、そして聖公会生野センターの理事長の宇野徹主教も出席し、楽しいパーティーが開かれました。現在、移転1年でなんと受講生が倍以上になりうれしい悲鳴を上げています。7月からは開講日も増やし、今後とも地域内外から求められる需要に応じていきたいと思っています。



移転1周年記念パーティ

社会宣教の霊性

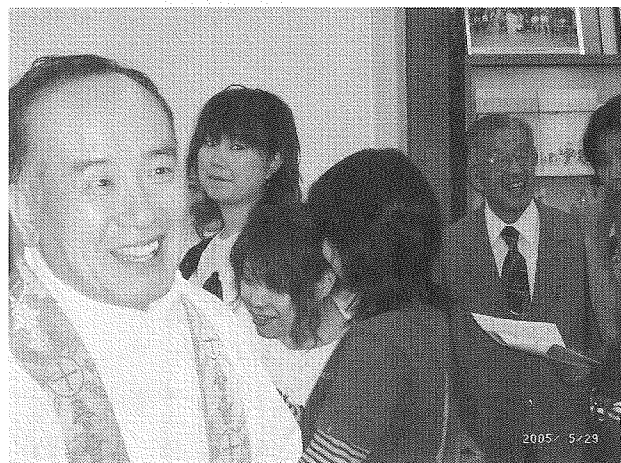
＝分かち合いの家を中心に＝

朴 耕造

キリストの中の兄弟姉妹である皆さんこんにちは。私は去る4月7日に大韓聖公会ソウル教区で主教按手を受けた朴耕造主教です。私は又15年間、「グリーンピース」という環境運動をするNGOで共同代表を務めております。日本でNPO法ができて、聖公会生野センターが法人になり、より一層大きな活動がなされることを願っております。今日は韓国聖公会の主教としてそしてNGO活動をしている者として皆さんと共に考えを分かち合える機会をもてるようになり感謝しております。

【分かち合いの家の始まり】

今から19年前の1986年に私はソウル教区の教務局長として働いていました。その時ある後輩の司祭が訪ねてきて、「貧しい生活を強いられている人々が暮らすところに行き教会でできることをしたならば良いのではないだろうか」という話をしました。そこでその後輩の司祭と一緒にソウルで貧しい人々が集まり住んでいる所に行きました。その後輩はそこで長い期間、夜学活動をした経験があり、あちらこちらを案内してくれました。そこでは家もなく行くところもない人がテントを張って暮らしていました。行ってみると幼い子どもが吸い終わった吸いがらやシンナーを吸って、捨



5月29日聖ガブリエル教会での聖餐式

てられたゴミが散らかっていました。

ここに住んでいる人たちのために教会が何ができるのだろうかと思いましたが、まず家一つ得なければと思いました。お金が十分に準備された状況でもなく、苦悶いたしました。当時他の教会で夜学を運営していて残ったお金が少しあるという話を聞いてその教会からお金を借りて小さな部屋一つと台所と板の間がついている小さな家を借りることになりました。そして若い司祭一人と若いボランティアたちが共に集まり、祈りから始めました。それから「勉強部屋（放課後の子ども対象のプログラム）」や「夜学」活動を始めて協同組合のような住民運動を始めました。それ以降、このような貧民宣教運動は野火のように広がり19年が過ぎた今は全国の11個所の分かち合いの家と34個所の活動センターを含んだいろんな機関が設立されました。

【分かち合いの家の基本精神】

- ① イエスと福音を身体で生きる復活の証人にならんとする。
- ② 祈る人として生きようとする。
- ③ 労働する人として生きようとする。
- ④ 共同体で生きようとする。
- ⑤ 正義のために闘う人として生きようとする。
- ⑥ 貧しく生きようとする。

このような分かち合いの家は祈りと労働、親交と社会活動を統合させようとする霊性を指向しているといえると思います。

【幸福とは】

私は始めて分かち合いの家が始められた時、少しばかり助けただけであり、30年間牧会だけに専念してきました。しかしいつも分かち合いの家のことを考えながら過ごしてきたといえると思いま

【真の幸福とは】

4世紀に新約聖書をラテン語に翻訳する時に beatus という単語を使用しましたが、これは幸福と祝福の概念をあわせたものであります。それで真福と呼び始めました。真福が語る幸福は主観的に感じる感情ではなく、この世での成功を語るものでもありません。真福が語る幸福とは神の命と霊を分かち合うことであり神との一致を成し遂げることです。

私たちが幸福に対してどのように話をしようとも、すべての人間は自身が考える幸福を必死になって求め追求します。私たちのすべての行動、これをしたければ市場でものを買うことから職場で働くことや、愛して結婚するすべてのことが幸福を追求する動機からおこなわれるということです。そして私たちが幸福を追求しても私たちが求める幸福はこの世にないということが問題であります。

イスラムのあるスピ教の先生が家の鍵をなくしてしまいました。彼は家の鍵を家の外の芝生で探していました。彼は膝を曲げて芝生に頭をつけて芝生のあいだあいだを探していました。通りかかった弟子が彼に近寄って尋ねました。

「先生、どうしたんですか？」

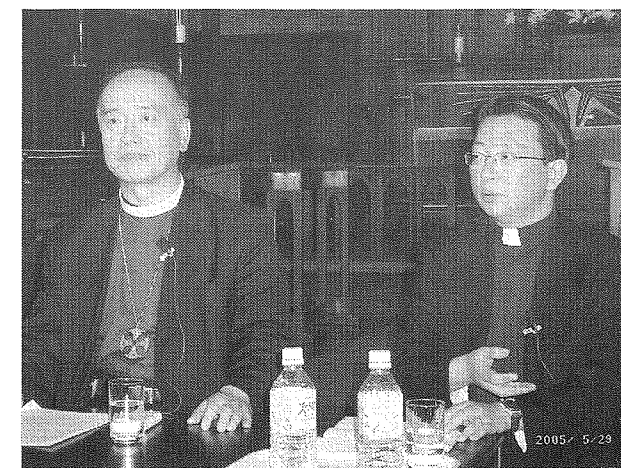
「家の鍵をなくしてしまったんだ」

「先生、その鍵はどこでなくされたのですか」

「家の中でなくしてしまったみたいだ」

「ならば何故、家の外で探しているのですか」

「そう、ここがもっと明るいからね」



左：朴主教、右：通訳の任太彬司祭

す。今日は皆さんと共に牧会生活をしながら考えてきた霊性の問題を共に考えてみたいと思います。

少し前、ダライ・ラマが書いた「幸福論」という本を読みました。韓国ではとても有名な本です。アメリカのある精神医学者がダライ・ラマと会い「人間はどうすれば幸福の道に入れるのか」という問題を討論しています。この本でダライ・ラマは「人生の目的は幸福」であると語っています。私はこの本を読み大きな衝撃を受けました。なぜなら今まで信仰生活をしてきましたが、幸福になるために信仰生活をしてきたようではなかったためです。真の信仰生活は愛であったり正義を実践しながら十字架の犠牲の道であると考えて、幸福のために信仰生活をすると思ったことはないからでした。しかしこの本を読んだ後で考えてみると私はすべての人間は幸福を求めている存在ということを知りました。

このようにすればこの世の苦しみと悲しみ、そして死から解放されて本当の自由と永遠の幸福を享受することができるのか？ということが私たちすべてが求めている道である考えました。パスカルはこのように言っています。「どんな人間が戦争に行き、どんな人間が戦争に行かないかという理由は二つともちょうど同じ欲望を二つの違う方式で解釈したためである。この欲望がすべての行動の動機である」。

つまり私たちが何をしようともその行動の動機は幸福になろうとする私たちの欲求というものであります。それならば幸福というのは何でしょうか？長い間言われてきた質問であります。今日大部分の人は幸福を物質的な繁栄であったり、心理的な安静とつなげて考えます。そして幸福の霊的な次元を話せば悟りや感謝、赦しのような徳を強調する事もあります。新約聖書は幸福に該当する言葉として Makarios を使用しています。マタイの福音書でイエスが山上の垂訓を宣布した時、この単語を使用しています。この単語は英語に翻訳した時 blessed (福あれ) と訳されました。

この比喻では家は幸福を示し、幸福は神との親密なることを意味しています。つまり人間は幸福の源泉である神との親密さを失っては、幸福をとんでもない所で探しているということでもあります。私たちはまさにそのような人間であります。

私たちは幸福がより物質的な成功、社会的な地位、又はいろいろな楽しいことに求めることができると考えて本当に熱心に生きています。しかしいくら努力してもそこに私たちが望む幸福がないということはまさに私たち人間の問題です。これがまさに人間の条件です。人間は永遠なる幸福を求めています。人間はどこに幸福があるのかは知りません。幸福になる鍵をなくしてしまったのです。

このような人間にイエスはおっしゃったのです。

【利己の欲求を乗り越えるために】

精神医学者や心理学者は私たちが生まれてから3つの基本欲求を持って生まれたと言います。

この欲求が充足された時、私たちは幸福感を感じるようになります。反対にこの欲求が挫折した時、私たちは深刻な挫折感と怒り、不安と悲しみを感ずります。それで私たちは安全に対する欲求を満たすために自身を安全にしておくことに執着をします。そこで人間は自分も知らずのうちに利己的になり、競争をして闘うようになるのです。この利己的な考えが集団的になると戦争を引き起こし他人のものを奪ったり殺したりするようになります。そしてこれをとても愛国的なことだと勸奨



分かち合いの家での子どものプログラム

するのです。甚だしきに至っては神に祈りながら戦いに勝たせてくださいとすることです。

今、私たちが生きている社会は資本主義社会です。資本主義社会とは人間の欲望を元にした社会で自身の欲望と安全のために競い、闘う社会です。この社会では力と権力が偶像になり、私たち自身も知らずにそれを通して自身の安全が保障されたいとするのです。そこで強いものは競争で勝ち、生き残りますが弱いものはだんだんより社会から疎外されることになります。しかし私たちが信じる信仰に従えばこの世を支える根本的な秩序は力と競争ではなく神の愛です。神の恩寵によって私たちはこのように生きている存在であるということです。そこで私たちは神の国の秩序に従い助け、愛し合い生きて行かねばなりません。

そのためには私たちの利己心を抑制することを知らねばなりません。しかし人間は元々自身の安全に対する欲求があまりに深いために自分の欲求を抑制するには力が必要です。それで私たちは信仰生活を通して自分の利己心が治療され浄化されるようにならねばなりません。

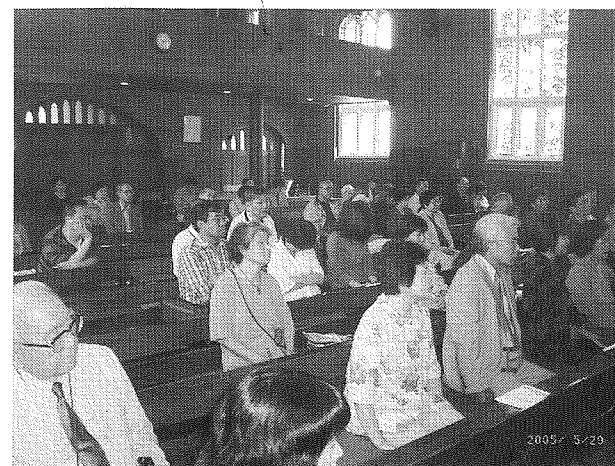
安全を願う私たちの欲求が神の愛により治療されたならば、私たちはお互いが争わなく平和に生きていく勇氣と力を得ます。神の現存を深く体験する人は他のことで安全を求めず神のみ旨で安定を求め平和を得ます。なぜなら神のみ旨によってのみ安全に対する欲求が満たされるからです。その時その人は初めて大きな平和と幸福を体験します。そのような人はこの世を平和を作り出すために努力するようになります。

【分かち合いの家の霊性】

1986年、韓国社会は本当にくらい時代でした。軍部独裁により国全体が苦痛を受けていた時代です。その時一握りの若い司祭たちが貧しい地域に入っていく、貧しい人たちと共に生活をしたのです。この行動は自己の利己心を克服しイエス・キリストの後に従う行動でした。信仰者としてこの世の価値に従うのではなくイエスが教えて

くださった新しい価値にしたがって生きていくためには私たち自身が変化の道を生きて行かねばなりません。それこそキリストの霊性が形成されていく一つの道であります。キリストが主導権を持ち、導いてくださる変化の過程です。この変化の過程は穏やかな道ではありません。この変化の過程は暴風と砂漠を突っ切る道であり、悪魔の妨害が潜んでいる危険に満ちた道です。この変化の過程はこの世の支配的な価値と衝突して造るものです。そこでこの社会の支配的な価値に順応して生きていく私たちに脅威を加える道です。私たちはこの道を通して徐々に変化し、成熟し、キリストの道にしたがって行くのです。その人はこの世の構造的変化、社会正義、世界的な次元の平和と和解のために闘うようになります。すなわちキリストの霊性は社会的霊性です。新約聖書では個人的霊性に関する言及は非常に少ないのです。その中心は常にその身体、その連帯が場所を占めているのです。キリスト者になるということはキリストの中にあるということの意味し、それは一つの有機体、一つの新しい共同体、一つの部分になることです。キリスト教の霊性の過程はキリストがその過程の始まりであり、終わりです。すなわちキリスト者になるということは単純にキリストを信じることや真似をすることではなく、キリストによって造られていくことです。

私たちはどこまで変化されていくのでしょうか？ 私たちはついに神と一つになる時まで変化せねばなりません。私たちが神の命に参与する日、



神様と一致を成し遂げるその時、私たちは真に自由と幸福を得るのです。いいえこれは神が私たちの存在の根源として私たちと一致しています。単に私たちがそのような事実をまだ悟り得ないだけです。もう幸福は私たちに来ています。幸福の源泉である神様が私たちの中にいらっしゃるからです。まだ私たちがその幸福を知らないことは、神様が私たちの中にいらっしゃるという事実をまだ悟り得ないからです。

【おわりに=イエスに従って】

私は教会生活の30年間で人間というものは本当に変化するのが難しいということを知っております。私たちの利己的な本能の根が深いからです。しかし私は希望をなくしてはいません。熱心に聖書を読み祈りながら愛するための努力をすれば、神が私たちに少しずつ変化させくださり、神の希望を掲げて生きています。

韓国と日本の聖公会がお互いのために祈り協力しあいながら努力すれば、神様が平和に生きていけるようにくださると信じています。もし人間の利己心のために闘いが起こったとしても私たちはそれに屈服せずに抵抗せねばならないのです。そのように生きていくことをもう一度語って、イエスの教えを信じイエスにしたがっていく道こそが幸福に至る道であると信じています。人類はイエス・キリストの道こそが真の真理と命に至る道であり本当の幸福に至る道であることを悟るべきだと考えます。私たちはその道に行くしかありません。十字架を背負い、自分の利己的な自我を捨ててイエス・キリストに従う時、私たちは変化の道歩くこととなります。そして最後には私たちは神様と一つになった幸福に到達し、共に平和に生きていくことができる世を造るために努力するようになるのです。

(パク・キョンジョ 次期ソウル教区主教)

教育の政治利用を抑制してきた装置の機能停止

金光敏

7月13日、栃木県大田原市教育委員会が、中学校の歴史・公民教科書に扶桑社を採択してしまった。大田原市教育委員会は、「バランス良く構成されていて、日本史全体の流れと各時代の特色が分かりやすい。文化史を重視し、日本文化に対し、誇りと愛情をはぐくめるような内容となっており、国際関係の理解にも適切であると考えている」と採択理由を説明している。

前回の教科書一斉採択から4年の歳月が経過し、日本社会の右傾化はさらに深化した。また、「新しい歴史教科書をつくる会（以下、つくる会）」は、この4年間、各地域の教育委員会に対する政治的攻勢を強めており、前回の低採択率を大幅に上回るのではないかとの見方もある。そうした矢先の大田原市での教科書採択であり、「つくる会」は大田原市が市町村立学校として初めての採択を受け、早速「歴史的な第一歩だ」とする見解を出した。

教科書マーケットは、文部科学省の検定を条件に、誰でも参入できるものである以上、「つくる会」の教科書づくり自体を否定することは難しい。ただ、教科書採択は、教育の独立性の象徴であり、近隣諸国からの批判に日本政府自らが説明している通り、教科書は「国定」ではない。教科書選定は、国家や政治による教育への介入を極力避けてきたという、言わば、教育基本法の実践の上に成り立っている。いや、教育基本法があろうがなかろうが、教育に対する国家権力や政治介入の制限や抑制は、国際社会に共通する規範であり、軍国主義賞賛の担い手として教育が利用された過去を持つ日本社会にとっては、なおさら重要なテーマだ。

「つくる会」は、自書の採択率目標を10%に設定し、各種の活動を繰り広げている。もちろん、各出版社が、採算性の観点から目標値を設定することはありうるが、しかし「つくる会」は、前回のリベンジだと息巻いており、そこを見る限りまるで自らの政治勢力の拡大をめざす陣取り合戦の様相である。その狙いは不謹慎極まりない。

教育に対する国家権力や政治の介入を容易に許すことになれば、それこそ右も左もこぞって、自らの政治勢力の拡大に教科書を利用し、学校現場は、どの社会的空間よりも、もっとも鋭利で熾烈なイデオロギー対立の現場と化してしまう。

大田原市教育委員会は、市町村立学校としては初めて扶桑社を採択することを知りつつ、あえて政治色の濃い決定を行った。大田原市教育委員会が、特定の政治性向を持つ人々によって作られた教科書を認めた意味は一体何か？ここにこの問題の本質が潜んでいる。教育の政治利用を抑制してきた社会のバランス装置が機能停止に陥ったことを示す。これはとても怖いことだ。

これから本格化する教科書採択にあたって、日本社会の行く末をほぼ決定づける8月になると考える。アジア諸国が反対しているなどという他力本願な議論では済まされない。問われているのは、日本の市民社会の未成熟の問題であり、無関心を装うことで為政者に加担している有権者の問題である。もはや議論するレベルは終わった。賛否をもって行動すべき時が来た。

(きむくあんみん

NPO法人コリアNGOセンター事務局長)

歴史をめぐる闘い

姜惠楨

今年の春以降、日本の歴史認識をめぐる日韓の葛藤が続いている。だが、韓国の批判や抗議の中でも少数の過激な言動ばかりが強調され、それらが「反日デモ」のひとりで片付けられてしまっている日本の報道状況からは、韓国の人々が何をどう問題視しているかが、なかなか正確に伝わっていないという感が否めない。

日本の教科書における歴史歪曲問題でいえば、1982年にも日韓に大きな葛藤が引き起こされたことがあった。その後、2001年には「つくる会」教科書の登場により再び深刻な局面があった。

日本からはこの両時期の韓国側の批判が一辺倒に見えるかもしれないが、1980年代と2000年代の批判には、大きな質的变化を踏まえた違いがある。かつての韓国の独裁政権は「反日」を国家統合の手段としたこともあり、日本の歴史歪曲に対する韓国民衆の批判も、国家主義や民族主義の枠をなかなか越えられない側面があった。だが、2000年代の韓国からの批判は、単なる反日を越え、アジアの和解と平和を実現するために不可欠な信頼のベースとして歴史認識を問う声が主流になってきたといえよう。

韓国社会は「反日」が抗議の主流だった82年以後、社会変革運動が急成長した80年代と、一定の民主化を勝ち取ったうえで社会運動が多様化した90年代を経て、21世紀を迎えた。今も抱える深刻な問題は多いが、10～20年の単位で振り返ってみれば、韓国社会は人類の普遍的価値を拡大する方向へ変化を遂げてきたといえるだろう。そして、その社会変革の延長で、これまで放置されていた国内の歴史問題に向き合う努力を重ねてきた。その努力とはここ45年、長くは15年前後の間に展開されている「過去史清算」の取り組みである。

「過去史清算」は大きく分ければ、①日本による植民地時代の歴史(加害・被害の両方)と、②朝鮮戦争や民主化運動の中で行われた虐殺や国家暴力など、近現代史を包括する形で展開している。対象になる歴史事件については、真相究明、責任の究明と処罰、被害への共感、改善・補償措置などが実行される。

例えば、大統領まで歴任した人物が80年光州民衆虐殺の責任問われ法廷に立たされたことや、元日本軍「慰安婦」被害者たちを韓国政府が放置してきたことを反省し生活支援の法律をつくったこと、かつて泣く子も黙らせた国家情報機関が民主化運動関係者を弾圧した数々の事件を調査する政府委員会が活動していることなどは、過去史清算運動の数十に及ぶ成果の一例である。

これらは、犠牲となった当事者の長期の努力によって実現したり、うんざりするような政争や社会葛藤を伴ったり、時には世論が真っ二つに割れるほどの鎮痛を伴ったりしながら、韓国社会自らの内部に鋭いメスを入れることで徐々に実現してきた。

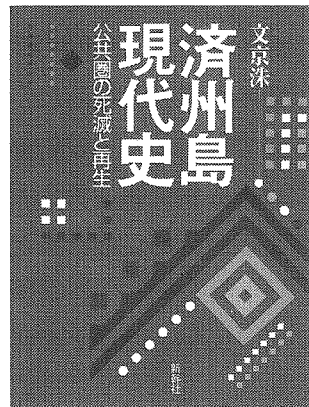
この過去史清算運動は、これまで蓋をしてきた歴史を掘り起こし、新たに書きなおす激しい闘いとして展開してきた。それは、勝ち取ってきた平和・人権・民主主義の現在の到達点に立って、社会の規範と原則を立て直すという意味で、社会を進歩させる動きだ。

そして、その流れを受け継ぐ言説として、2000年代の韓国市民社会は日本の歴史認識を問うている。日本社会は「反日」と目を逸らさず、日本の変化をつくることで、この声に応えてほしい。

(かんへじょん アジアの平和と歴史教育連帯国際協力委員長)

本から「在日コリアン」を考える ②

濟州島現代史—公共圏の死滅と再生



文京洙著
 定価2500円+税
 新幹社

『濟州島現代史』を出版して、東京と大阪で出版を祝う会が開かれた。著者の文京洙さんは華やかな場をあまり好まない人で、乗り気ではなかった。しかし

文京洙さんが書き下ろした本格的な本としては初めてだったし、ましてや博士号取得のための論文であった。出版社の社長としては、出版を祝う会は純粋に祝う気持ちはもちろんのことだが、宣伝効果が大きいことを強調して、出版を祝う会開催の承諾を得た次第である。

その出版を祝う会に二度出席して、文京洙さんとのおつき合いの長さを改めて思い起こすことになった。私は学生時代から「変わらないねえ」と、よく友人たちに言われる。文京洙さんこそ「変わらない」人だと思う。文さんの生き方、人との接し方、性格、本当に変わらないと思う。

東京でのお祝いの会は参加者は25人と小規模であったが、金石範先生、梁石日先生など、「濟州島四・三事件を考える会」の主なメンバーが集まり、中味の濃い会となった。文京洙さんは「濟州島四・三事件を考える会」の会長を15年もやっている。この15年のあいだ、東京と関西、日本の濟州島のあいだに立って、四・三事件とねばり強く向き合い続けた。地味な性格なのであまり目立たないが、今日の、韓国大統領が濟州島民に謝罪するという四・三事件をめぐる状況をつくった功労者の一人であった。

大阪の会は80人が集まるという、もう少し広がりをもった人々が参加した。多くの方からのお祝いの言葉をいただいたが、私にとって印象的だったのは、①膨大な資料に基づいた根気のいる仕事

をよくぞ成し遂げた。②学术论文でありながら、文章がとても読みやすかった、ということである。

文京洙さんが、研究者になった頃から濟州島現代史を研究しようと考えていたかという、そうではないだろうと思う。それは文章が読みやすいという点とも関係するが、文京洙さんは学生の頃、文学を志していた。私は小説は読んだことはないが、文芸評論を読んだことがある。それは決して読みやすかった文章ではなかったが、それらの土壌があったからこそ、読みやすい文体という、評価が出てきたのだと思われる。

膨大な資料に基づいた根気のいる仕事のできたのも、それは濟州島四・三事件を考える会の会長をやっている関係上、必然的に資料を読まざるをえなくなったり、また、必要上会わざるをえなかった人々から多くの情報を与えられたりしてのことであったと思う。しかし、いつの時点で文京洙さんが『濟州島現代史』を書こうと決意したのかは分からない。

私は文京洙さんの『濟州島現代史』は、文京洙さんでしか成し得ない、かけがえのない仕事だと思っている。文京洙さんは他にもやりたい研究があるにちがいないが、自分にしかできないもので、私たちに本書を呈示してくれたのは英断だったと思う。とりわけ濟州島四・三事件に関わっていると、日本にいる私たちに何ができるだろうか、と考えざるをえない。当地にいる当事者にはなかなか書けないものを、在日濟州人がやる。この本は濟州島において繰り広げられた市民社会運動史を書いたもので、本国においても広く読まれていくことだろう。そして文京洙さんのこの成果を越える研究成果が出てくるまで本書の出版意義は生命力を失うことはないだろう。

(こ・いーさむ 新幹社代表)

『濟州島現代史—公共圏の死滅と再生』は
 聖公会生野センターで取り扱っています。

TEL 06-6754-4356 FAX 06-6754-4357
 e-mail: ikuno@nssk.org

高二三

自分の苦しみが
 自分だけの苦しみでないことが
 わかるまでにかんりの歳月を
 費やしてしまったと
 悔やんだことが
 あるか
 自分だけの苦しみだとおもって
 腹を立て
 うらみ
 ひがんでもいた自分自身の姿に
 恥じ入ったことが
 あるか
 それでいて

悔悟

丁章

自分の苦しみとして
 ひきうける覚悟をしたことが
 あるかないか
 そのときはじめて
 自分の苦しみは
 おなじ苦しみをもった者と
 つながり
 おなじ苦しみをもたない者とも
 つながれるということ
 経験したことが
 あるか

詩集『マウムソリ 心の声』より

丁章 (ちよん・ちゃん)

1968年、京都市にて出生

大阪外国語大学Ⅱ部中国語学科卒業

現在、大阪府東大阪市在住

著書

詩集『民族と人間とサラム』(新幹社)

詩集『マウムソリ -心の声-』(新幹社)

詩集『闊歩する在日』(新幹社)

丁章さんの詩集(第3集まで発刊)は
 聖公会生野センターでも取り扱っています。

「안녕하세요=あんにょんはせよ」の時間から

村上 恵依子

聖公会生野センターの活動を紹介するページの第3弾です！今回は韓国語教室をご紹介します。1993年から始まった韓国語教室は最初は1人からのスタートでしたが、評判もよく生徒が増えていきました。昨年は20数人と少なかったのですが、昨今の韓流ブームのおかげでしょうか、受講生は35人と大盛況です。クラスは入門、初級、中級、研究班の4クラスに分かれています。

この教室の特徴的なところは、研究班です。他の教室ならば、上級班とも言うのですが、聖公会生野センターは違います。上級のさらに上に行く、研究班なのです。しかも、4クラスある中で、研究班が一番生徒数が多いのです。これはつまり、他の教室で中級、上級までを修めて、その後の勉強場所を探している方がやって来られるのです。ですから、研究班のそのレベルの高いことと言ったら……。授業は全部韓国語。でも、笑いの絶えない授業です。みなさん熱心で、授業が終わるのは4クラスの中でいつも一番最後です。

研究班の生徒さんたちは、授業以外でも、先生と韓国語で会話をします。入門や初級の生徒さんはその姿を羨望のまなざしで見つめ、中級の生徒さんは韓国語で交わされている会話に隙を見つけ何とかなり込もうとしています。時々、そんな生徒さんたちの姿を見ていると、こんな私でも、



韓国語教室交流会の一コマ

勉強しつづければ、本当に研究班の生徒さんたちのようになれるのだろうか？と思ったりもします。(ちなみに私は初級班) 20代から、60代まで、さまざまな方がともに学んでいます。どの方も一生懸命、でも、楽しみながら勉強している姿はとても印象的です。研究班だけでなく、他のクラスも紹介すると、入門は研究班の次に生徒数が多く、初めて触れる韓国語に難しいと言いつつも楽しんで勉強しておられます。初級班は、4クラスの中で一番人数が少ないのですが、その分とてもアットホームです。そして、6人中男性は1人ですが、皆さん張り切って勉強されています。そして、中級班。朝鮮高校出身で通訳の勉強をされている先生のもと、熱い授業が展開されています。

12年目を迎える韓国語教室ですが、聖公会生野センターにとって、果たしてきたその役割はとても大きいと思っています。12年間果たしてきた役割というのは、ここに通う生徒さん一人一人が、日・韓・在日をつなぐ掛け橋という存在になっているということです。今まで、中学、高校、大学と英語を勉強してきましたが、語学を勉強することは同時に、文化をも勉強することであるという意識を持たずにいたように思います。しかし、この韓国語教室で、言葉だけでなく、その裏に息づく文化、その言葉が生まれ出てきた背景というものに触れることで、文化を体感することができます。そして、その文化を体感するという経験が、日・韓・在日をつなぐ「掛け橋」という存在になっていくのだと考えています。この「掛け橋」という存在を生み出している韓国語教室をセンターの大切な役割として、これからも大切にしていきたいと思っています。皆さんも一度来てみませんか？「안녕하세요 = あんにょんはせよ」を交わせに。

(むらかみ けいこ 聖公会生野センター
アルバイトスタッフ)

NPO法人と聖公会生野センターの組織

呉 光 現

特定非営利活動法人はこれまでの公益法人(財団・社団・社会福祉等)とは違い、認可ではなく、必要な人員と活動の趣旨、組織形態等の書類を整えば官公庁から認証される法人です。これまでの法人格取得のためには高いハードルがあった諸活動の法人取得の道を広くしたと言えます。もちろん予算規模から言うと数億円を超える国際援助団体から100万円未満の小さな市民団体までその規模は様々です。今回は簡単にそのNPO法人の組織について述べたいと思います。

基本的には所轄官庁(大阪の場合は大阪府庁)に書類を提出します。必要な書類は「定款」「社員名簿」「役員名簿」「初年度の事業案」「初年度と翌年度の予算」等です。社員とは聖公会生野センターの場合は「正会員」です。役員は「理事」と「監事」です。当センターの特徴は役員は正会員のの中から選ぶことです。ですから、聖公会生野センターの運営に参画するためには正会員になることが前提になります。

2つ目に、情報の公開です。基本的な事業、会計等は役所に提出する義務があり、誰でも閲覧できます。これによって法人の事業の透明性を確保しようとしています。

3つ目に「会員」です。社会福祉法人等は理事・評議員等が法人を構成しますが、NPO法人は最高決定機関が「会員総会」になります。ここで事業報告、会計報告、事業案、予算案が承認さ

れ、理事の選出がされます。

以上のことを踏まえて、聖公会生野センターは以下のように構成されています。

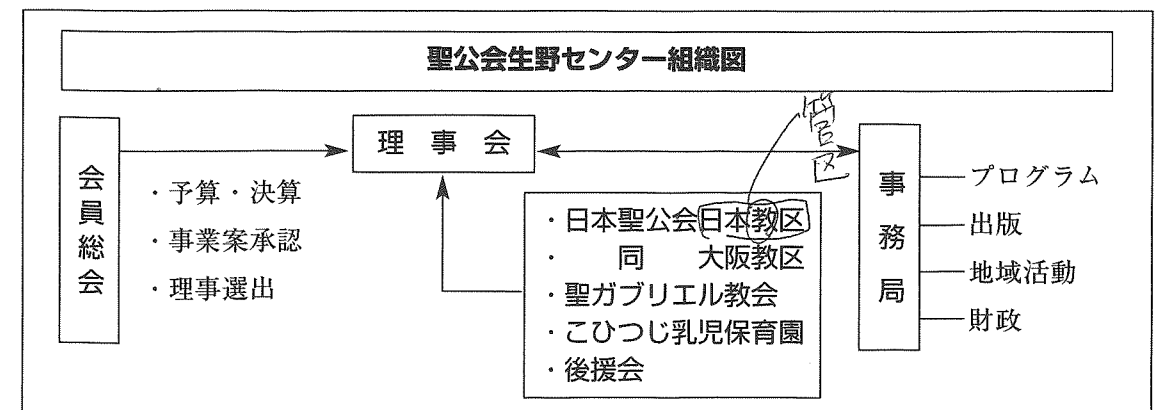
年に1回開催される会員総会が最高決定機関ですが、日常的には理事会です。法人成立当初の2年の役員はこれまでの聖公会生野センターの運営委員会を踏襲し、同じメンバーで構成しています。法人になったからといってこれまでおこなってきたことがまったく変わるわけでもないわけですし、スムーズな移行という点からも役員構成は変えませんでした。ただ、今後は社会の要請、聖公会生野センターの将来像などを考えると役員が更に幅広いものになる必要はあるかも知れません。

会員総会の次に重要な決定機関は理事会です。年に2回以上開催し、重要な決定をここでおこないます。その次には事務局ですが、事務局は日常的な業務をおこなうところです。まさに聖公会生野センターの身体として働く部分です。

以上、簡単に述べましたが、みなさまによく知って頂きたいのは、NPO法人聖公会生野センターはより開かれたセンターとして多くの人の参画のもとで運営されていく、又はそれを願っているということです。

今後とも、NPO法人聖公会生野センターにご注目ください。

(お・くあんひょん 聖公会生野センター総主事)



鈴木 恵一

この10年近く、聖公会生野センターの活動に関わってきました。昨年、生活環境が大きく変化中、ある日これまでに経験したことのないような疲れを感じました。精一杯仕事しているつもりだったのですが結局はからまり。

それを 精神科に通院経験のある友人に話すと、すぐに医者に行ったほうが良いと勧められました。そのとき「精神科というのは、もっと状態のひどい人がいくところであって、ぼくのような者が診察を受けるところではないでしょう。」と言葉を返すと、「なぜをひいたりしても必要なときは誰でも医者に行くだろう？だれかと比較して医者に行くか？」といわれ、はっとさせられました。精神科の診察が必要な状態であるにもかかわらず躊躇してしまう心を自分は持っていたということに気づきました。今まで精神障害者の地域生活支援などの活動にかかわっていましたが、じつは、ぼく自身が「精神病」「精神障害」に対して差別感を持っていたということに気づきました。

近所の精神科のクリニックにしてみました。お医者さんには「仕事のしすぎですね。」といわれ「抑うつ状態」という診断名がついて、すぐにお薬を飲むようにとのこと。12月から3月まで自宅療養をしていました。たくさんの人に約束していた仕事を止めて迷惑をかけるのもつらかったですが、それよりも、やれば出来る

病気になるってのはじめて気づかされた世界

とっていたことを 出来ないと認めるのはもっとつらいことでした。また、「精神病」に対する偏見の強さを、身を持って体験することができました。

久しぶりに本を読む時間をつくることができました。10年前に買って最後まで読めなかった本「知恵の樹」(H. マトゥラーナ+F. バレーラ=著 管啓次郎=訳、朝日出版社)を最後まで読みました。この本にも出てくるのですが、世界とは生物の数だけ違うものであり、経験とコミュニケーションによって形作られ変化し続けていく。なぜならばその経験と出会いを知覚する当事者が何より違う多様な存在だからです。

知らない世界を排除し不安を消し去ろうとするとき、差別や偏見が大きくなっていくのでしょう。

今は無理だと感じたことは「無理しても」断って、これまで急ぎすぎた仕事をゆっくりに行っているところです。そして、精神障害者の地域生活の支援者でもあると同時にまたそのサービスの利用者でもある立場へと変わった今、新しく見えてきた世界を大切にしたいと思います。

聖公会生野センターの様々な活動のひとつにでも興味があるのでしたら、ぜひ一度お越しください。ここでの出会いや体験が、あなたの世界を広げる経験のひとつになるかもしれません。

(すずきけいいち 聖公会生野センタースタッフ)

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

- ◇正会費 年額 1口 5,000円
- ◇後援会費 年額 1口 3,000円
 - ・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
- ◇自由献金・クリスマス献金
 - ・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
 - ・銀行振込 UFJ銀行 東大阪支店
普通預金 3711311 「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター
〒544-0003
大阪市生野区小路東1-17-28
TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357
E-mail: ikuno@nssk.org
<http://www.nssk.org/province/ikuno>
発行人：宇野 徹
編集人：大橋 襄